

も く じ

特集：芸術文化助成財団の現状と課題

■座談会

芸術文化助成財団の現状と課題

〔岡本光義／片岡賢一郎／片山正夫
立野晴夫／渡部幸世／渡辺通弘（司会）〕 4

文	・平成3年度芸術選奨決まる	16
化	・平成3年度芸術作品賞決まる	18
	・平成3年度文化庁優秀映画作品賞決まる	19
	・日本芸術院賞受賞者決まる	20
	・平成3年度舞台芸術創作奨励賞決まる	21
庁	・平成4年度移動芸術祭・同巡回公演 春季公演日程決まる	22
	・平成4年度中学校芸術鑑賞教室 公演日程決まる	23
だ	・文化庁買上優秀美術作品	24
	・重要無形民俗文化財の新指定及び選択	25
よ	・近代和風建築総合調査について	27

■展覧会紹介

■企画展	The EAR NO.1001 浅岡慶子＋三木富雄	29
■共催展	ルネ・ラリック展	29

・芸術文化振興基金 ニュース	30
・国立劇場ニュース	31

表紙写真

日本オペラ協会
原嘉壽子「よさこい節
一高知情話・純信お馬一」
於：新宿文化センター
（平成2年5月）

題字デザイン※桑山弥三郎

芸術文化助成財団の 現状と課題

岡本光義 ■ 財アフィニス文化財団常務理事

片岡賢一郎 ■ 財アサヒビル芸術文化財団事務局長

片山正夫 ■ 財セゾン文化財団事務局長

立野晴夫 ■ 財三菱信託芸術文化財団事務局長

渡部幸世 ■ 財ソニー音楽芸術振興会専務理事

渡辺通弘 ■ 文化庁文化部長（司会）



渡辺 昭和五十年代までの文化庁の政策は、国だけが芸術文化の振興について責任を持つという考え方で進められておりましたが、昭和六十一年に文化庁長官の私的諮問機関である「民間芸術活動の振興に関する検討会議」が、「芸術活動振興のための新たな方途」という報告書を出したのを契機に、芸術文化振興は国だけではなく、地方公共団体と民間企業等の三者が協力をして進めることになりました。

そうした中で、民間による芸術文化支援の最も望ましい形態として脚光を浴びているのが、芸術文化助成財団です。

なぜ財団方式による助成が望ましいのかというと、第一には、基金という形をとることにより、経済の状況に影響を受けにくい、安定した芸術文化支援ができるということ、第二に、公益法人をつくることによって、事業の中立性が確保できること、第三は、公益法人からの支援ということで、援助を受ける側が安心してお金を受け取れるということがあります。

そして、現在、この助成財団は十八を数えるに至っておりますが、昭和六十三年には芸術文化助成財団協議会をおつくりになるとともに、その要請を受けて、国の方でも芸術文化助成財団を特定公益増進法人制度として認定することにより免税額の枠を倍増することとしております。

本日は、助成財団協議会の幹事団体の皆様方から、それぞれの財団の設立の趣旨、その活動、特色等についてご発言をいただければと思います。まず最初に、助成財団協議会の代表幹事をされております三菱信託芸術文化財団の立野事務局長から、財団のご紹介等をお願いしたいと思います。

六十周年を記念して、昭和六十二年十二月に設立されました。銀行では昭和二十八年に山室記念奨学財団を設立して、育英奨学事業を、また、創立五十周年には「夢の実 愛の基金」をつくって、社会福祉関係の社会還元活動を行ってまいりました。六十周年記念事業には何がふさわしいか、いろいろ社内検討されましたが、経済大国になった日本に、今後要請されるのは人々の心の豊かさではなからうかという話が盛り上がってまいりました。たまたまその頃、先ほどの報告が出されたこと

を知り、当時の渡辺芸術課長をお招きしてお話しも伺ったりして、芸術文化支援の財団を設立する方向が定まっていたということです。設立以来、今年で四年になりますが、年に二回、計十回ほど助成をやってきており、百五十八件、三億七千四百万円という助成規模になっております。

寄附行為では幅広い事業を展開することができるようになっておりますけれども、今まで行ってきた助成分野はいわゆるクラシック音楽の分野です。「オペラ公演」、「オーケストラ」、「作曲家団体主催公演」——これは日本人の作曲家の組織しておられる作曲家団体の発表公演です。それから「音楽祭」、全国で最近盛んに音楽祭が行われるようになりましたが、そういう中のクラシック音楽を普及振興するのに優れた企画を対象とする他、音楽研究の学会や研究会活動なども含まれております。それから、我が国の音楽団体の「海外公演」と、大体五つの分野があります。

さらに、例えば音楽大学の学生の音楽活動などは将来のプロの予備軍の活動であるわけですが、そういったものにも目を配ろうという趣旨で、「その他」という部門を設けて、細かい目配りもできるように工夫しております。助成財団の事業を進める上で、助成対象の選考がもっとも重要な意味をもちますが、出

捐者の三菱信託銀行は設立の当初から「金は出すけれども、口は出さない」という方針で、選考、助成額ともにすべて音楽の専門家にお願ひしていただきます。

今までの助成の傾向を金額で見ますと、オペラが五十四％で半分以上を占め、音楽祭が十八％、海外公演が十六％、オーケストラが八％、作曲家団体が四％、その他はまだ少なくて一％という状況でございます。

その他に、私どもの財団の会議室が空いておりますので、そこを音楽関係の団体に無料で開放しています。

また、東京の上井草にある三菱信託銀行の体育館もオペラとかオーケストラの練習場として開放しております。

渡辺 三菱信託芸術文化財団は、助成だけを純粋な助成型財団としては文化の分野では日本で初めての財団だったと思います。そういう意味では、非常に大きなインパクトを与えたわけですが、いろいろ特色のある事業をお進めいただいているということで、心強く感じました。

次に、音楽・美術の面で、国際交流等を含め、芸術文化支援を積極的にお進めになっておりますアサヒビル芸術文化財団の片岡事務局長にお願ひいたします。



岡本光義氏

ざいまして、ちょうどこの三月で満三年になりました。設立の趣旨としましては、平成元年にアサヒビールの創業百周年となりましたので、浅草吾妻橋のところに高さ百メートルの本部ビルを建てたわけです。記念事業を数多く行いましたが、その他に利益の社会還元も行いましょうということで、芸術文化財団をつくりました。

同時にもう一つ、財団を創設しました。それはアサヒ健友会という腰痛センターですが、酒屋さんの職業病的なぎっくり腰の整形クリニックということで、これは一般の患者さんにももちろん来ていただいているわけですが、そういう医療法人をつくりました。

別に、八年ほど前からアサヒ生活文化研究振興財団というのがありまして、これは食に関する生活科学、生活文化の研究助成を行うということで、合計三つの財団がアサヒビール社の中にあります。

現在では、財団を三つ運営しているわけですが、やはりメセナ時代の流れといえますが、

うちの社員の間でも非常に関心が高まっておりますのは芸術文化財団で、これが中心です。芸術文化財団の年間の事業費は五千万円です。これは欲がちょっと深いんですけれども、美術部門、音楽部門、海外研修生部門という三つの分野に分けてまして、助成額は大体三分の一ずつになっております。

美術は、国公立の美術館が企画する絵画展で、洋画、日本画、版画、彫刻を対象にしまして、伝統工芸と写真は除いております。音楽はクラシック主体で、オペラ、オーケストラ、室内楽、合唱等、多数の出演の音楽公演です。この間も電話で「ジャズはどうなんだ」というお問い合わせもあったんですが、これはご遠慮いただいたということでございます。

海外研修につきましては、美術と音楽の三十歳ぐらいまでの若い方の海外の研修について、年間百万円程度の助成を行うというものです。別に渡航費として五十万円の補助もしています。



片山正夫氏



渡部幸世氏

目指し、具体化しようということで——当時の長岡社長の強いイニシアチブがあったわけですが——六十三年の三月に文化財団を設立したわけです。その当時は、輸入品の関税がゼロになり、経営的に将来非常に厳しい展望しか立てられない状況の中で、経営者があえてこういう財団をつくらうと決断したことが一つの特徴としていえるかと思えます。

文化財団では、いわば総合芸術でありますオーケストラの支援を、そして特に東京への一極集中が顕著ですので、地方の文化の核として機能すべき、あるいは機能している地方のオーケストラに、経済的な支援をすることを中心としております。

具体的な事業ですが、まずプロのオーケストラの企画に対して、年間トータルで一億円程度の助成を行っております。これはそれぞれのオーケストラの意欲的な公演企画に対して助成をする他、例えば楽器の購入とか、そういういった運営助成のものにも助成を行っております。



片岡賢一郎氏

問題点としては、音楽部門のニーズが非常に高く、美術展のニーズは比較的低い。これは各地の美術館がバックに地方自治体を持っているということもありまして、あまり窮乏感がないんですかね。そういう意味合いから、もっと音楽部門に助成額を増額しておいてもよかったのではないかと反省があります。今後の課題です。

審査は公正を期しておりますが、問題点としては海外研修の音楽の希望者が非常に増えてきておりますので、その審査は大変だということです。選考委員の方々の審査は録音テープを主体にやっていくわけですが、この審査に大変な苦勞が伴うので、この問題をどうするかというのが一つあります。

私どもはこの三月で第六回の助成を終わりにしまして、ちょうど百件になりました。助成金額は累計で一億四千万円になっております。その中で、海外研修の第一回生の帰国があり、その研修生の帰国後第一回のリサイクルの助成をしました。そういったものを含めまして、

さらにオーケストラ団員の研鑽に助成を行っております。具体的に申しますと、一つは海外で勉強したい、研修をしたいというオーケストラ団員に、年に五名程度、累計しますと二十名ほどになりますが、助成を行っています。

それとは別に、オーケストラの若手の団員に長野県に集まっていたがしまして、毎年三十名程度ですが、集中的な短期セミナーを、主としてアメリカのトップクラスのオーケストラのプレイヤー、あるいはアンサンブル、室内楽のプレイヤーを講師として呼び出して、一週間みっちり昼夜の研鑽を積んでいただいております。この短期セミナーの間は所属するオーケストラ公認のもとに、日頃の過密なオーケストラ活動のスケジュールから離れ、みっちり勉強ができる。それも日頃あまり顔を合わすことのない他のオーケストラの方と同じかまの飯を食うという経験ができますので、皆さんに大変喜んでもらっております。



渡辺通弘氏



立野晴夫氏

ちょうど百件になっているということでございます。渡辺 アサヒビール芸術文化財団は本日ご出席の中では、一番新しい財団ですが、既に各方面で活発に事業を展開されておられることに敬意を表します。次に、音楽の普及活動、特にその中で地域のオーケストラも含めましてオーケストラ助成に力を発揮されております、アフィニス文化財団の岡本常務理事から財団のご紹介をいただきたいと思います。岡本 私どもの財団は設立いたしましたしてちょうど四年になりました。親会社は日本たばこ産業でございます。昔からたばこという文化、非常に文化性を持っています、へたばこ「文化」という意識が旧専売公社の時代から会社の中にもありました。たばこを題材にした浮世絵を収集したり、展示する博物館を既に昭和五十三年に渋谷に建設しております。日本専売公社が昭和六十年に株式会社化されましたが、生活文化産業を志向する企業を

以上の他、オーケストラ音楽の普及という観点で、主として児童・生徒を対象にしたオーケストラに関するビデオもつくって、学校等に頒布したりしております。

また、音楽の分野における調査・研究に対する助成もやっております。

私どもの財団は対象をプロのオーケストラに絞っており、限られた原資とはいえ、一件当たりについてみますと、助成金を結構出せますので、それぞれの楽団で思い切つてやってみようという企画が実現できるような形で助成を行っております。意欲的な企画はお客様が入らないようなものがえてして多いんですが、そういったものに對してできるだけ助成をしていることが特徴といえます。

渡辺 「たばこ文化」ということで、積極的に芸術支援をされているのを大変心強く伺いさせていただきました。

次に、演劇部門、美術部門を中心にして幅広い芸術文化支援の手を差し伸べていらっしゃる、財団のご紹介をお願いいたします。

片山 セゾン文化財団は昭和六十二年に芸術文化の支援を目的として設立されて、間もなく五年を迎えようとしております。堤理事長が私財を出捐してつくったものですので、正確な意味で企業財団かどうか微妙なところ

があるかと思ひます。

堤はセゾングループの立場でもずっと長い間文化支援をしてきましたが、財団設立を機に改めてまた違う立場からじっくりと恒常的に支援活動をしていこうというものです。今年度までに百六十件余り、金額にすると約八億円の助成をしてまいりました。

演劇というのは、現在でも、民間の芸術助成財団の助成対象にあまりなっていないようです。私どもの財団はよそ様のあまり手の及ばないところをむしろカバーしていくところにポジションを置こうと考えております。演劇を調べてみますと、一番援助が得られにくくて、今でこそ芸術文化振興基金とか、立派な財団ができています。設立当時は、特に現代演劇に対する支援が少なかつたので、演劇中心で当面行こうということになったものです。

助成対象としては、一つには現代的で実験的な試みに重点を置いていきたい。伝統とか古典みたいなものも現代の視点から読み解いていこうとか、今日的な視点から再構成してみようというものはもちろん大歓迎です。

二つ目に、国際交流に寄与するものになるべく重点的に取り上げていくという方針です。三つ目に、エスタブリッシュされたような権威のある方よりも、むしろ評価がいまだに

定まっていけないような若い人たちに對して重点を置いて助成をしていくという方針です。

助成活動だけではなくて、自主事業という形で主催公演等を行うこともございまして、例えば去年平成三年の春には、ピーター・ブルックさんという演出家の演出により「テンペスト」というシェークスピア作品を招聘いたしました。日本での公演を行いました。

演劇の世界というのは解決していくべき問題が非常に多くて、しかも非常に複雑になっています。助成の仕方といたしましても、ただ申請のあったものに、これがいいとか悪いとか選別しまして、いいものに助成金を出していくというだけでは、なかなか問題の解決になつていかないという部分が多くて、私どもも限られた財源ですので、それを有効に生かすためにはきめ細やかなプログラムをつくって、実情に對応していく必要があるかと考えております。

現在の演劇界では、例えば人材であるとか、情報であるとか、創造の場であるとか、そういったものが非常に欠落しております。このようなインフラストラクチャーの整備がまず急務ではないかと思ひます。また、企業の行う文化活動とは違う、財団としての文化支援のあり方にも沿うものではないかと考えま

して、例えば演劇の専用の稽古場をつくって皆様にお貸しするとか、あるいはアートマネジャーのための海外留学コースをつくってみようとか、あるいは演劇のデータベースの作成をしているところに援助してみようとか、今、段階的にそれを実現しているところであります。

渡辺 堤理事長の個人の資産を基礎としてつくられた財団として、非常に特色のある、柔軟な対応をされているようで今後も活躍を期待したいと思ひます。

最後にになりましたソニー音楽芸術振興会はどうですかといえは事業型の財団ですが、昭和五十二年からのしにせでもございまして、その効果からいって、助成とほとんどかわりがない事業を数多くされていきます。専務理事の渡部さん、振興会のご紹介をお願いいたします。

渡部 今、お話がありましたように、助成財団協議会の中で数少ない事業型財団として活動しております。

私どもの会は二つのフィロソフィーを持ってスタートしました。一つは、クラシック音楽の普及振興を柱にすることです。もう一つは、クラシック音楽の底辺を支えていく若いアーティストの発掘と育成に焦点を当てたことです。

まず底辺の拡大というところでは、全日本大学オーケストラ大会というのがあります。近年、いわゆる一般大学のアマチュア・オーケストラが大変盛んになっております。これらの個々の演奏活動、すなわち点の活動を一つの線に結んでいく、あるいは面を広げていくことで、底辺のクラシック音楽の普及振興にも結びついていくのではなからうかということではじめました。昭和六十年から発足いたしましたので、今年で第六回を迎えたところですが、この企画自体が年々浸透してまいりまして、今や抽せんをしなれば出場できないという状況にまで拡大しております。各出演団体に對しては、遠隔地であれば交通費の援助、または宿泊費の助成等を含めて、出演団体に對して参加助成金という形で行っております。ともかく多くの大学では、部費とか運営費がまだまだ不足しているとのこと。楽器を買うにしろ、楽譜を買うにしろ、部活動としての部費が潤沢でないというところから、私どもがささやかな形で、ある意味では違つた形での助成を考えて始めた企画の一つでございます。

その他にも、妊娠六カ月から九カ月のお母さん方を対象にしたちよと変わったもので、「0才まえのコンサート」と称するものを行っております。これなどもどちらかとい

ますと底辺開拓ということになりますか。年に東京で四回、大阪で二回、定期的に開催しております。お母さん方に対するクラシック音楽による情操教育を主眼として始めたわけですね。実際にいらつしやるお母さん方の中で、クラシックの音楽を生で聞かれる方は七十五%ぐらいになるわけです。その方々にアンケートをとってみますと、「クラシック音楽がこんなにすばらしい、感動的なものだったのか」というのを初めて体験した」という答えが返ってきました。私どもとしてもクラシック音楽の生の演奏に接する機会がいかに少ないかということを実感しています。

これも実質的には限定されたお母さん方が対象なものですから、不特定多数に對するコンサートとは違つた形でのインパクトが出てきているのではないかと思っております。

もう一つ、日本の若いアーティストの発掘・育成という面で、私どもが一番力を入れておりますのは、海外で勉強なさつても、日本に帰つてきてなかなかデビューするチャンスがない方々に對して、私どもで経済的なものを含めてバックアップをすることです。

海外の実力のあるコンクルの上位入賞者の中で、日本の中ではまだまだ評価されていない、あるいは日の目の当たらない人たちが

大勢いらっしゃいます。そういう方々にチャンスメーカーしていくことが、我々のような事業型財団の使命ではなからうかということ、デビューシリーズといいますが、「パフォーマンス・トゥデー（今日の演奏）」というシリーズ名で、年に三、四人ぐらいずつリサイタルを提供しているわけでございます。

その他に、公益活動の一環として「チャリティー・コンサート」を開催しております。これは単なる慈善コンサートというよりも、日赤の血液センター基金へのチャリティー・コンサートとして、東京と大阪で一回ずつ年に二回開催しております。これも何らかの形で社会への奉仕につながっていくものではないかと思っております。

さらには、海外から著名な教授あるいは演奏家をお招きして、若いアーティストたちへのマスタークラスといいますが、講習会等の事業を展開しているわけでございます。

それから、助成事業としては、日本演奏連盟の「新人演奏会」、これは東京、大阪、名古屋、札幌、福岡、仙台と六カ所にわたって開催しているわけですが、文化庁さんと私どもとで助成させていただいております。

もう一つは、二期会の新人演奏会の助成もさせていただいております。

私どもが事業型としてスタートしたのは、

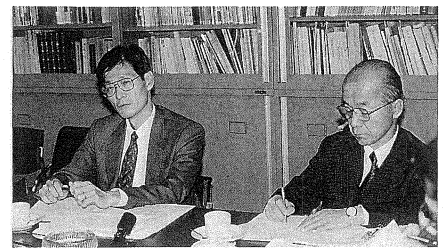
ないということも、私どもの中ではつきり把握できるような状況にまでその存在価値が認められてきております。

渡辺 ソニーさんの方からは、見返りは期待していないが、しかし財団の活動が企業にもいい形で反映されているというお話がございました。文化産業と申しますか、そういった意味では文化と非常にかかわりの高いセゾンの片山事務局長の方から、会社と与えた影響みたいなものも含めましてお話しただけだと思います。

片山 セゾン文化財団は当然組織として独立しておりますし、また企業とは多少違ったスタンスで活動しているわけですが、特に情報の面では非常に密接に連動しながら事業を行っております。

企業の行う文化活動と財団の行う文化活動は、役割分担がおのずとできてきております。財団は長期的にじっくりと方針を立ててやっていくこと、個々のイベントというよりも、例えばインフラストラクチャーのようなものに重きを置いて助成していくとか、先導的なものにも思い切った助成するとか、そういったすみ分けができてきているという感じがいたします。

また、私どもの財団は陰徳というわけでもないんですけれども、今までそれほどお金を



助成型がまだない中で、どういう形で援助するか、あるいは日の当たらないところにスポットを当てていった方がいいのではないだろうかというところから事業型という形態をとったわけでございます。助成財団協議会の方が多額の助成をなさっている中、まだまだ目の目の当たらない、あるいはこれから当てなければいけないような内容のものを私どももまた新しく掘り起こしながら進めていきたいと考えております。

渡辺 各財団におかれては、公の基金ではなかなかできないような、多様な、しかも特色ある助成事業を思い切った形で進められておいて、芸術文化関係者と文化庁にとりましてはまことに感謝に堪えないところでございます。しかし、少なからぬお金をそのために支出された出捐者の立場からいいますと、財団の活躍がどのような効果を生んでいるのかはやはり

使った広告を出したり、パブリシティをしたりということとは行っていないかたんですが、こういうことは口づてで広まって、私どもも驚くぐらい皆様に認知され、また激励されています。

渡辺 ありがとうございます。それでは次にアフィニス文化財団さんお願いします。

岡本 もともと日本たばことしては、先ほど「たばこは文化」ということも言いましたが、クラシック音楽も含めて、いわば文化的活動といえますか、それが広告に近い形であれ、助成的なものに近い形であれ、いろいろ行ってきたわけです。財団をつくることによって、まさに公益法人としての活動を志向すること、親会社である日本たばこで行う冠公演を始めとする文化活動との接点といえますか、そういった面での情報の交換といえますか共有が非常に大事になってきました。

そこで、アフィ



り気になるのではないかと思います。社会が財団の活動をどのように受けとめているのか。また財団等の活動が出捐した企業等に、どのような影響を与えているか。そういったことについて、皆さんのご経験に基づいていろいろ教えていただければと思います。

それでは、ソニーの渡部さんからお願います。

渡部 私どもの場合は、企業のコーポレート・イメージを上げるという前に、いわゆるコーポレート・シチズンとしての立場をまず遵守していこう。それがひいては社会的な評価が得られ、ソニーとしての一つの信用度が増すであろう。したがって、あくまでもコーポレート・イメージの付加的なものは二次的なものとして考えて財団をスタートさせました。

そういうわけで、私どもの事業の運営は、もちろん基金はソニーからの出捐でございますが、立場としては完全にニユートラルでありまして、企業母体のほうからの指図とか、指示は一切ございません。

おかげさまで、活動については高い評価をいただいております。また、ソニーの社員の中でも文化度が大変高くなっていることも事実でありますし、新入社員の入社動機の中に、やはり音楽芸術振興会の存在が決して無では

アフィニス文化財団でやることと日本たばこでやるべきこと、あるいはやりたいことの整備とありますが、すみ分けといえますか、そういった議論が社内でも活発に行われるようになってきました。そういう面では意識に対するインパクトがございます。

それとプロのオーケストラに対する助成が事業の中心でございます。オーケストラに対する公演、演奏会に対する助成についての一般の方々の反響はなかなかストレートには伝わってまいりませんが、直接的な当事者でございますオーケストラの団体からは、いろいろな意味で思い切った公演ができるとか、特に楽器の助成等については大変助かるという、声が入ってきております。

それと先ほどのオーケストラ団員の海外研修に対する助成は、プロのオーケストラに対する助成で一般公募という形ではないんですが、例えば海外研修をされている方同士の情報、それから音楽家同士としての情報、あるいは学校の先輩後輩とか、いろいろな形があるんでしようけれども、とにかくあそここの財団は音楽家の海外研修をやっているらしいということ、これについては問い合わせが大変多くなっております。

渡辺 アサヒビールさんの場合はいかがでしょうか。

片岡 まず企業内部の問題として、最近、うちの若い社員の間で文化理解が進んできたということなんです。実はうちの会社では昨年五年ぐらいいなっていますが、毎年年末に全社員が『社長への提言』というレポートを出し、五千通ぐらい集まるのですが、これを社長がお正月に全部読むわけです。その中で、一昨年末から昨年末のレポートについての特徴は、簡単にいいますと、社会貢献をアサヒビールがしてくれなければ、また文化貢献をしてくれなければ、そういう会社にも動いても意味がないとか、入社した意味がないとか、そこにプライドがあるんだという提言が増加してきているということです。新しい一つの潮流です。

それまではそういうことがあまりなかったんですが、新傾向として文化理解について新しい動きが出てきたということです。

これはやはり財団活動と、一昨年に新設されました企業文化部の毎月の活動、例えばロビーコンサートに若い音楽家を呼ぶとか、文化講演会を毎月開くとか、例えば今日も梅原猛さんの文化講演会が社内であるんですが、そういうことをやっていることのストックだと思えますが、非常に文化理解が高まってきました。企業として文化への助成とか貢献をしなければ、いい人材が確保できないと

いますか、採用できなくなってきたのかなという感想をアサヒの人事部も持っているんです。

年配の社員につきましても、最近の話ですが、高齢で亡くなりました二人の役員がおられまして、その方々がわりあい芸術に関心が深かったんです。そうしましたら、遺族から芸術文化財団に数百万円のご芳志をいただきました。

このような動きがあるということは、企業自身が文化理解型の企業として新しく成長を始めているということの証左であると思います。

また、お酒の業界には年間五千万円も芸術に出すんだしたら、取引先に還元してくれという主張があるんです。(笑)これを懸念していたんですが、そういう声は最近なくなりまして、今のところ見当たらないようです。飲食店からも「いいことをやってくれている企業、だなあ」といわれるようになっております。ですから、社員の言動やテレビコマーシャルのあり方にしても企業の知性と感性をハッキリ感じさせるものでないといかなんということ、アサヒビール自身がいろいろ変わってきたと思っております。

渡辺 財団をつくったことが積極的な形で企業にもフィードバックされているというお話

あります。

財団の活動が社内報とか、新聞、その他雑誌に出ます。そういうのを見て、社員の芸術文化に対する関心が非常に高まる。それを通じて、社会貢献活動への理解・関心が深まってきました。奨学事業、社会福祉、芸術文化支援活動と三本の柱がありますが、これらの活動が、社内この四月から社会貢献事業推進室をつくって、ますます社会貢献活動を展開していききたいという土壌になり、あるいは推進力になったということはあるようです。

私自身、財団で仕事をやっていまして、昔の職場の関係とか、あるいはよその企業の方々など、各方面から非常に好意的な言葉をちょうだいしております。ある企業の元老の方から、「三菱信託銀行はいいことをおやりになりましたね」ということを言われて、良い気分を味わわせてもらったことがあります。もちろん音楽界関係の方々からは大変感謝されていることはいまでもありません。助成財団の存在意義について非常に確かな手ごたえを感じているところです。

渡辺 今のお話を総合いたしますと、例えば会社の信用度やイメージが高まる。それから社員の士気にいい影響があり、それが人材確保にもつながる、あるいは企業の文化度が高まる、更には社会貢献への気運が高まる、ま

た世論の反応も大変前向きであるということ、大変ありがたいお話かと思えます。皆様方も機会を見まして、財団をつくった経験をお話して、他の企業の関係者にもぜひお話しただければと思うわけでございます。

次に、助成財団の将来の展望について皆様方のご意見をお伺いできればと思います。

助成財団を英語に直すと「ブライベート・ノンオペレーショナル・ファンデーション(民間非事業財団)」になりますが、この「ブライベート・ノンオペレーショナル・ファンデーション」はアメリカの公益法人の中核をなしております。

セゾンさんは別として、今あります助成財団は圧倒的に企業財団が多いわけですが、実はアメリカではノンオペレーショナル・ファンデーションのほとんどは個人設立ということなんです。しかも、多くの方々の零細な浄財が集まってできた財団もあるということです。そうした個人の参加を今後どのようにして進めていくのか、そういった問題もあるかと思えます。

そういったことも踏まえまして、助成財団の将来展望をお聞かせください。

渡辺 私どもは純然たる助成型財団ではございませんので、まず事業の展開としては、日の当たらないものをどうやってサンライズさ

を聞いて、大変心強いわけでございます。

三菱信託さんの場合、どちらかというと堅いイメージが強い信託銀行がこれだけ思い切った財団をおつくりになったわけですが、反響はいかがでしょうか。

立野 会社の方々に聞いてみましたところ、銀行は信用が大事な商売ですから、これによって信用がますます高まった。信託銀行として芸術文化支援は大変ふさわしい選択だった。取引先とか、その他関係業界の方々からは非常にお褒めの言葉をちょうだいしています。銀行としての信頼度とか、知名度を高めるという面でも、芸術文化財団をつくったことは大変よかったとおっしゃっています。

当財団をつくったときは、今の社長が常務で、会長(現財団理事長)が社長だったんですが、三菱信託銀行にはトップを始め社員の中にも音楽の好きな方がたくさんおられて、芸術文化支援財団をつくらうという話は、わりあいすんなりとまとまっていたとのこと。折から先ほどの『芸術活動振興のための新たな方途』のことも文化庁さんから伺い、これこそがもつとも時宜にかなった財団の設立であるということで、非常に弾みがついたということがございます。今でも入社式では、オーケストラから室内楽を頼んで、新入社員に聞かせるというような音楽的な風土が

せるかということ、もう一つは提案ですけれども、せっかくこういう形で助成財団協議会ができていられるわけなので、協議会のPRを何らかの形で実現できないかと思えます。といいますのは、皆さんもご経験があると思いますが、私どもの方にもいろんな助成の申請というか、問い合わせがかなり入るわけです。いちいちご紹介するんですが、まだまだこういうすばらしい助成財団協議会があるということの認識が大変不足しているのではないかと。

また、各助成財団さんが海外留学の助成をなさっているわけで、そういう方たちが帰ってきてリサイクルを個々になさるチャンスはやはり少ないのではないかと、それであるならば財団協議会がまとまって、そういう人たちのために帰国リサイクルみたいなものをバックアップするようなことができないだろうか。各財団さんが少ない予算の中から少し出して、まとまれば一つの大きなものになるので、一つの大きなコンサートも実現できるのではないかと、私も自身は考えました。

渡辺 協議会がその十八の会員団体の仕事をもっとPRできないかというご指摘でした。今回の座談会も『文化庁月報』に載せるためにやっておりますし、さらに月報では各団体のご紹介もするような機会を設けていきたい

と思います。また各メディア等にも働きかけまして、できるだけ助成財団の事業を紹介していただくつもりですが、皆さんお気づきの点があればご注意いただきたいと思います。

立野 協議会のPRについてですが、文化庁で全国の都道府県の文化担当者を集められて会議をおやりになったせいか、私どものところにたくさん問い合わせが来まして、各県にパンフレットをどんどん送っております。こういう全国的な会議などで、文化庁あたりから紹介していただくと、非常に有効な反応があります。

片山 今のお話とも関連するんですけども、私、去年夏に二ヵ月ほどアメリカに行つて、アメリカの財団の方とお話する機会が何回あったんですが、驚かされたことが二つありました。一つは彼らのネットワークの広さというか、例えば何か相談をしたり質問をしたりすると、その場で電話をとって芸術団体に電話をしてくれたり、あるいはそれが国際電話だったりするわけです。そういうのは非常にうらやましかったということがあります。

もう一つは、向こうは財団の歴史が長いので、成熟しているせいだと思いますが、一つ一つのプログラムは非常に小さかったりしますが、現実にはコミットしたきめ細かなフォローをしたプログラムで、しかも先見性がある

あるといえますか、例えば今問題になっている環境問題に対応するプログラムも何十年も前から計画的に手がけているといったようなところには大変感銘を受けました。

助成財団協議会でも、財団同士の一つのネットワークもありますでしょうし、あるいは海外の財団活動の情報の一つの窓口といえますか、そういった機能もそのうちできてくるというふうなことを考えております。

渡辺 ネットワーク化というのは大変重要なことで、協議会自体の機能の強化もネットワーク化の前提になるのかと思います。

片岡 やはりマスコミへの働きかけの強化が、今後、私どもの大きな力点を置くところではないかという感じがするんです。例えば助成先を決定して発表しましても、なかなかそれを掲載してくれません。それは何も宣伝という意味ではなくて、そういうことをもつとPRすることによって、地方に埋もれているような音楽団体にしても、美術団体にしても、今まで以上に応募があるということになってようかと思っています。

たまたまこの間の日経新聞の「メセナ欄」に、立野さんのところの助成先一覧が出ていましたね。せめてあのぐらいの掲載を各プレスの方で、いろんな事情はあるでしょうけれども、助成一覧を掲載してくれるようなこと

があればいいですね。これは一般紙だけでなく、業界紙についてもいえるのかなという気もするんです。

立野 私どもは、新聞、音楽雑誌など、心当たりのところには全部、助成先をお知らせしております。掲載していただけないところもありますけれども、掲載されると各地の音楽関係者の目にとまって助成希望の照会が増えるといった効果があります。

片岡 やはり財団というものの対する理解が一般国民を含めまして低いんですね。『企業』というものは分かっている。『財団』とは何ぞや』ということと分らないんですね。

渡辺 最近、助成財団に関する新聞報道が増えていくことは事実なので、ぜひこういった傾向をさらに強めていきたい。そのためには、助成財団協議会と文化庁がよく連絡をとりまして、いろいろと考えていく必要があるかと思っています。

岡本 先ほど片山さんからお話があったことと関係するんですが、私どもの財団に話を限っても、限られた原資とはいえず、対象をプロのオーケストラということで限定して、試行錯誤みたいなことで四年やってきましたが、毎年助成が積み重なっていったら、それが将来にどうつながるのかということをサポートする必要があると思うんです。

ありました。それから、先ほどセゾンさん

の方からもご指摘がありましたが、アメリカではきめの細かい先見の事業が行われているということですが、これはアフィニスさんのおっしゃったスタッフの問題に絡んでくるのかと思います。文化庁としてもそこを重視しております。来年度から新たに国がアートマネジメント担当の養成事業を始めることになっており、将来は各財団にも専門職として芸術文化を十分理解した方たちが育つことを期待しているわけでございます。

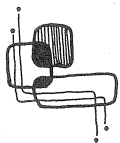
立野 協議会の今後の事業についてですが、先ほど片山さんから、アメリカでは各財団間のネットワークが緊密なものができ上がっているというお話がありました。さし当たってそういうことに力を入れていってもいいのではないかと思っております。何か事業を行うことも考えられるでしょうけれども、当面は緩やかなまとまりの中で、会員の皆様のご意見を伺いながら、できることをやっていくという行き方ではないかと思っております。

渡辺 一つご紹介をしておきたいと思いますが、平成四年度に文化庁の文化普及課に芸術文化活動支援専門官を新たに置いて、メセナ活動、特に皆様方助成財団の活動に協力させていただきますので、よろしく願いいたし

ます。

また、今度、芸術文化助成財団協議会が「メセナ財団をつくりませんか」という、企業等に対する助成財団設立のお誘いのパンフレットをつくってくださったということでございます。大変ありがたく思っております。

こうした呼びかけが効果を上げ、助成財団の数が増えること、そして財団の内容がさらに充実するというのが、とりもなおさず日本の芸術文化が伸びるかどうかのカギの一つになっていると考えております。今ある十八の助成財団は、日本の助成財団の草分けとして各分野で活躍されるとともに、民間セクター全体を引っ張っていただければとお願いする次第です。本日はどうもありがとうございます。



編集後記

近年我が国でも増加してきた芸術文化助成財団による助成活動は、今回御紹介したように、柔軟で、個性があり、継続性を有するなど、公的機関や企業による助成とは異なる特色を有しており、芸術団体等に対する支援として大きな意義を有している。このところの景気の減速のため、企業から支出される公演活動に対する協賛金等は減少傾向にあるようであるが、今後、一時的な景気の動向に左右されることなく、芸術文化助成財団の設立が進み、個々の助成財団の助成活動がさらに充実していくことと、こうした活動が各芸術団体等に一層周知され、活用されていくことが期待される。

(Y)

「文化庁月報」五月号

(通巻第二八四号)

平成4年5月25日印刷・発行

編集文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号

発行所 株式会社ぎょうせい

本社 東京都中央区銀座7丁目4番9号

営業所 東京都新宿区西五軒4-2

電話(03)3268-2241(代表)

振替口座 東京 911-61番

印刷所 (特行政学会印刷所)

定期購読のおすめ

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

定価一九〇円(本体一八四円)送料四六円
年間購読料二、二八〇円(税込)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 ぎょうせい 営業第二課・宣伝係
☎(03)3269-4145 (ダイヤルイン)

●本誌は、文化庁の編集により発行しておりますが、掲載文は、あくまで個人の責任において、自由に書くことを建前としております。したがって本誌の見解は、文化庁の見解ではありません

©1992 Printed in Japan